

## 国土交通大臣表彰 当別町ふれあいバス

～官民協働で地域公共交通の活性化・効率的にバスを運行～

当別町内ではいろいろな種類のバスが走っているわりに、乗車の対象者ではないため、ただ見送るだけの町民。また地域を総合的にカバーする路線バスがないため、まずはマイカー頼み。そうした問題点を見事に解決したコミュニティーバス、「ふれあいバス」が2009年7月に地域公共交通活性化・再生優良団体として国土交通大臣表彰を受賞しています。



当別町企画部 企画課長

五十嵐 一夫 さん

### 「バス交通体系の確立」を重点に 平成18年度から実証運行開始 ダイヤを組むにも一苦労

当別町内の病院や大学へと走っていくバスを横目に「同じ方向なんだから、ちょっと乗せてもらえると助かるのに」とため息をつく町民。特に高齢者に多く見



ふれあいバス (通称ふれバ)

受けられ、患者でもなければ、学生でもないため乗せてはもらえず、見送るしかありませんでした。人口2万人弱の当別町は、多くの自治体がそうであるように高齢化が進んでおり、最近の調べでは人口に対して65歳以上の高齢者の割合は約22%。また高齢者がおうおうにして交通弱者であるケースは否めませんでした。

南北に長く伸びる町内には町の福祉バスやスクールバス、企業独自の送迎バスなど複数のバスは走っていても、目的や区間は非常に限定的。総合的にカバーする路線バスの運行がなく、マイカーに頼らねばならない状態にあったため、適切な移動手段の導入が課題になっていました。

当別町は平成16年に近隣の市町村との合併が決裂し、以降は単独で歩む決意を固め、「当別町再構築プラン」を策定。より暮らしやすい町づくりを目指し、さまざまな論議が行われましたが、その中の重点プランの一つが「バス交通体系の確立」でした。平成17年から住民や道路管理者、大学の有識者、警察なども交えて「当別町バス交通体系調査検討委員会」を設置。これまでバラバラに運行されていたバスを官民一体となって一元化していこうという斬新なアイデアが出され、平成17年度にはバス体系の調査検討を実施。平成18年度は国土交通省の公共交通活性化総合プログラムを活用した運行改善策の調査、利用促進の検討、実施に取り組み、実証運行事業を行っています。こうして行政や民間の垣根を取り払ったバス運行が実現化し、公募によりふれあいバス(通称ふれバ)と名付けられました。ただし、そこに至るまで声はかけたものの「ウチはちょっと遠慮したい」という事業者もおり、紆

余曲折があったのも事実です。まずは走らせるバスと運転手が揃わなければ、発車オーライとは、なかなかいきません。準備期間はかなりご苦労されたようです。

さらに全国でも唯一の取り組みであり、何にもかもが新しい試み。当時を振り返り当別町企画部の五十嵐一夫企画課長は「バスの運行は当別町地域公共交通活性化協議会で一元化し、今まで別々の事業者が走らせていたバスの本数を確保し、かつ別の路線も作り、それを限られた台数のバスで市街地をぐるぐる回そうというものでしたから、当時の担当者はかなり頭を抱えたと思います。役場の企画課の職員が受け持つことになり、いかんせん運行ダイヤなんて組んだ経験もなく、まずは札幌市交通局さんへ丁稚奉公（笑）。ダイヤの組み方を一から教わってきたそうです。しかし、いざ作ってみると、各停留所を回る時間の取り方がキツキツで余裕がなかったり、乗客がJRへ乗り継ごうと思ったら時間がありすぎるなど、最初は随分検討する部分があったようです。それでも順次改善され、大変良いダイヤになっていきました。産みの苦しみをしっかり味わいました」。

実証運行1年目の平成18年度には7路線を確保し、運行1年目の運賃は1回1路線200円、一般の定期券は1カ月1,500円、1年12,000円でした。



## 利用者増につなげるため 積極的なPR活動も

実際に運行してみると「便利ですね」と好感は得られたものの、マイカー頼みのライフスタイルが浸透し、最近まで路線バスが町内を巡回するということがなかったため、まず直面した問題は「バスに乗る」という習慣に親んでもらうこと。そのため広報誌で知らせることはもちろん、バス祭りといったイベント、北海道日本ハムファイターズの観戦チケットが当たるイベントなど、きっかけづくりに力を注ぎました。

またJR当別駅から電車で札幌の職場や学校などへ向かう町民も多数いることを把握できていたことか



広報誌

ら、潜在的に利用者はおり駅までマイカーで行く人たちに「通勤、通学は“ふれバ”で」というPRもしました。

## ノンステップバス、BDF仕様で 町民にお返し。取り組みが認められ 国土交通大臣賞を受賞

今回参加した事業者の下段モーターズは、もともと自動車の整備工場であるため独自にノンステップバスに改造し、天ぶら油を使ったBDF仕様をしています。「この町でお世話になっているのだから人にも、環境にも優しいバスを走らせたい」という強い気持ちがあったそうです。小学生からは「あつ、このバスは海老フライの匂いがするね」という声もあがりますが、自然と環境教育にふれることができているようです。

さらに人を乗せるだけでなく、図書返却のためにわざわざ図書館に行かなくてもいいよう返却本を預かり、夏になれば地元の農産物が並ぶ当別町駅前の「ふれあい倉庫」まで、農家の負担を軽減するため野菜を運ぶなども検討されています。

そんなふれあいバスを運行している当別町地域公共交通活性化協議会に2009年夏、うれしいニュースが飛び込んできました。地域公共交通活性化・再生優良団体大臣表彰を受賞したのです。2009年7月8日には国土交通省で授賞式が行われました。前出の五十嵐課長は「賞をいただけるとは、本当にびっくりしました。感激です。やはり地域住民と一緒に汗を流すことが大事だと痛感しました。これからも、もっと、もっと乗っていただき運賃収入を安定させることが必要で、継続させていこう努力したいと思います」と話します。

顔見知りの町民同士が和やかに会話しながら進んでいく、心ふれあうバスは、今日も当別町の、のどかな田園の中を走り抜けていることでしょう。